

第1学年 算数科学習指導案

1 単元名 「ひきざん」

2 こんな子どもたちだから

本学年の子どもたちは、1学期に、求残・求補・求差の場面を通して繰り下がりのないひき算の意味や式の表し方について学習してきた。縦断的カリキュラムの『〇がいくつ』で考えると、第6単元「10よりおおきいかず」において、「10いくつ」を「10といくつ」の見方でとらえられることを学習している。さらに、第12単元「たしざん」では、繰り上がりのあるたし算は、『10のまとまり』をつくって計算すると分かりやすいということを学習してきた。

1学期の学習をふり返ると、92%の子どもが「10いくつ」を「10といくつ」と分けることができている。また、7-4の文章問題では97%の子どもが立式でき、未習の12-9の問題においても、90%の子どもが立式できた。しかし、思考力、表現力の観点から見ると、12-9の問題で式の考え方を図や言葉で表すことができている子どもは、52%であった。つまり立式はできても、その式の考え方を図や言葉で表すことは十分ではなく、計算方法について確かな理解ができているとはいえない。

以上のことから、『10のまとまりといくつ』で考えるよさを十分に実感させ、ブロックや図、式を使って計算の仕方を表し、順序よく説明することを通して、計算方法が確かに理解できる子どもを育てる必要があると考える。

3 こんな教材を・こんな手だてで

本単元では、11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算の仕方を考え理解し、確実にできるようにするとともに、それをを用いることができるようにすることをねらいとしている。

これは、下記の学習指導要領解説(算数編)にあたる。

A 数と計算

(2) 加法及び減法の意味について理解し、それらを用いることができるようにする。

イ 1位数と1位数との加法及びその逆の減法の計算の仕方を考え、それらの計算が確実にできること。

本単元で扱う『10のまとまり』をつかって考える活動を通して、繰り下がりのある減法の場合でも、「10いくつ」を「10といくつ」と見ることをとらえさせる。「10といくつ」に分けることで、減数・被減数が大きくなっても計算が容易になるよさを実感させたい。

『10のまとまり』をもとにした考え方は、本校の縦断的カリキュラムに位置付けられている通り、「何十と何十の加法・減法」、第2学年の「何百と何百の加法・減法」、第3学年からの「3位数、4位数の加法・減法」、「小数の加法・減法」、「分数の加法・減法」などの学習において、『〇がいくつ』という考え方で学年を縦断してつながっていく。

そこで指導にあたっては、以下のような単元構成の工夫を行う。

つかむ段階において、繰り下がりのない(2けた) - (1けた)の計算を取り上げ、被減数を『10のまとまりといくつ』に分けて考えたことを振り返る。この考えは、単元全体を通して用いる考えであり、はじめに振り返ることで、未習の繰り下がりのある減法計算においても『10のまとまり』をつかえばできそうだという見通しをもてるようにす

る。そして、 $12-7$ の計算の仕方をブロックの操作を通して考え、「12を10と2に分けて、先に10のまとまりから7とっても（減加法）、先にばらから2とっても（減々法）『10のまとまり』をつかって計算できる。」ことを理解させたい。

次に、解決する段階では、前時の考え方を活用し、減数が10に近い場合のひき算について考える。ブロック操作や考え方の交流を通して、『10のまとまり』から一度にひく減加法の考え方のほうが、はやくて簡単であることに気付かせたい。また、第5時で減数が9, 8, 7, 6の計算練習に取り組みせ、減加法の計算の定着を図るとともに、『10のまとまり』から一度にひく容易さ、便利さを実感させたい。その後、減数と被減数の一の位の差が3以下のときの計算の仕方について考える。ブロック操作を中心に考え、ばらから引いたほうが、はやくて簡単な場合もあることに気付かせる。第7時では、減数と被減数の差が3以下の減法計算の練習を行い、減加法と減々法でやりやすい方法を選び、正確に計算する力をつけていく。

さらに、いかす段階では、ひき算カードを使ったゲームを通して、今までに培ってきたひき算の計算をより確かなものにし、カードをたくさん取るための工夫を交流しながら学習内容を深めていけるようにする。また、単元の最後に問題作りの時間を設定し、絵から減法の場面を見出して図や言葉で表現し、ひき算をより一般的にとらえることができるようにする。

4 こんな子どもに（単元の目標）

- ◇ 11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算の仕方を考え理解し、確実にできるようにするとともに、それを用いることができるようにする。
- 既習の減法計算や数の構成をもとに、11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算の仕方を考えようとしている。（関心・意欲・態度）
- 自分の考えを、操作や言葉などを用いて表現することができる。（数学的な考え方）
- 『10のまとまり』に着目して、11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算の仕方を考えることができる。（数学的な考え方）
- 11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算ができる。（技能）
- 『10のまとまり』に着目することで、11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算ができることを理解する。（知識・理解）

観→毎時間に重点的に評価する観点
 導→導入段階（めあてづくり）
 解→考えをつくる段階（自力解決）
 交流→考えを交流する段階（交流～まとめ）
 適・ふ→よさを味わう段階（適用問題・ふり返り）

5 単元計画（13時間）

《重点的に評価する観点と交流場面の位置付け》

時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
観	関	考	考	技・理	技	考	技	技	技	技	技・理	考	
時間配分	既習学習のふり返り	導	導	導	計算力の定着	導	導	導	導	導	導	導	評価
		解	解	解		解	解	解	解	解			
		交流	交流	交流		交流	交流	交流	交流	交流	交流		
		適	適	ふ		適	交流	交流	交流	交流	交流		
		ふ	ふ	ふ		ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ		
内容	13-3 12-2 15-3	12-7 適用問題 11-5	12-9 適用問題 13-9	14-8 11-8	習熟	12-3 適用問題 11-2	計算練習 13-6 15-7	カードをつかって 大きいくべ	カードとり	計算しりとり	文章問題	問題作り	診断

《単元構成の工夫と縦断的カリキュラムの位置付け》

二重線は縦断的カリキュラムにおけるもとなる考え

段階	配時	学習活動と内容(・は主な算数的活動)	支援と評価
つかむ	1 第1時	<p>○ 既習の「(2けた) - (1けた)」のひき算の計算の仕方をふり返る。</p> <p>13-3 12-2 15-3</p> <p>・ブロックや言葉, 図などを用いて計算の仕方を表す。</p> <p style="text-align: center;">10のまとまり</p>	<p>○ 『10のまとまり』に着目できるように, ブロックを10と端数に並べた子どもを取り上げる。</p> <p>(関) 既習学習をふり返り, ブロックや言葉, 図などを用いて計算しようとしている。</p> <p style="text-align: right;">(観察・ノート)</p>
	1(本時) 三組・五組(第2時)	<p>○ 12-2をふり返り, 12-7の計算の仕方を考える。</p> <p>・『10のまとまり』をつかう考え(減加法・減々法)で, ブロックや言葉, 図などを用いて計算の仕方を表す。</p> <p style="text-align: center;">10のまとまり</p> <p style="text-align: center;">適用問題 11-5</p>	<p>○ 減加法と減々法の違いをとらえやすくするために, 始めにブロック操作をして動きを確認する。</p> <p>(考) 12-7の計算を, 『10のまとまり』に着目して考え, 説明している。</p> <p style="text-align: right;">(観察・ノート)</p>
解決する	1(本時) 一組・二組(第3時)	<p>○ 12-7をふり返り, 12-9の計算の仕方を考える(減加法)。</p> <p>・『10のまとまり』からひく考え(減加法)で, ブロックや図, 言葉などを用いて計算の仕方を表す。</p> <p style="text-align: center;">10のまとまり</p> <p style="text-align: center;">適用問題 13-9</p>	<p>○ 減加法のよさに気付かせるために, 減加法と減々法の考えを取り上げ, 比較する。</p> <p>(考) 減数の大きさに着目して, 『10のまとまり』から1位数をひくことを考え, 説明している。</p> <p style="text-align: right;">(観察・ノート)</p>

<p style="text-align: center;">2</p> <p style="text-align: center;">第4・5時</p>	<p>○ 減数が5より大きい場合の計算の仕方を考える。</p> <p style="margin-left: 2em;">14-8 11-8</p> <p>・『10のまとまり』からひく考え（減加法）で、式や図、言葉を用いて計算の仕方を表す。</p> <div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 10px auto;">10のまとまり</div> <p>練習問題(P109 ⑤・P110 ⑦)</p>	<p>○ 減加法についての理解を図るために、多様な方法(図、式、言葉)を取り上げる。</p> <p>(技) 減加法による計算ができる。</p> <p>(理) 減加法による計算の仕方を理解している。(ノート)</p>
<p style="text-align: center;">1 (本時 四組)</p> <p style="text-align: center;">第6時</p>	<p>○ 12-9をふり返り、12-3の計算の仕方を考える(減々法)。</p> <p>・ばらからひく考え(減々法)で、ブロックや図、言葉など用いて計算の仕方を表す。</p> <div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 10px auto;">10のまとまり</div> <p>適用問題 11-3</p>	<p>○ 減々法のよさに気付かせるために、減加法・減々法の考えを取り上げ、比較する。</p> <p>(考) 減数の大きさに着目して、『10のまとまり』をつかってひくことを考え、説明している。</p> <p style="text-align: right;">(観察・ノート)</p>
<p style="text-align: center;">1</p> <p style="text-align: center;">第7時</p>	<p>○ 12-3をふり返り、12-4の計算をする。</p> <div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 10px auto;">10のまとまり</div> <p>○ 減数と被減数の一の位の数の差が3以下の場合の減法の計算練習をする。</p> <p>適用問題 13-6(求残) 15-7(求差)</p>	<p>○ これまでの学習で10のまとまりをつかって計算できたことを想起させるために、減加法・減々法の考えを取り上げる。</p> <p>(技) 減数の大きさに着目して減加法と減々法を自分で選び、解決できる。</p> <p style="text-align: right;">(観察・ノート)</p>

い か す	3 第 8 ・ 9 ・ 10 時	<p>○ 減法の計算練習をする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>カードをつかって 大ききくらべ カードとり 計算しりとり</p> </div> <p>・ 計算カードを並べたり，計算カードを使ったゲームをしたりする。</p>	<p>○ 被減数，減数，答えのそれぞれの法則性に気付かせるために，並べた引き算カードから気付いたことを交流する。</p> <p>(技) 既習の学習内容を生かして，11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算が確実にできる。(観察・発言)</p>
	1 第 11 時	<p>○ 減法の文章問題をする (P 114・115)</p> <p>12-3 14-6</p> <p>・『10のまとまり』をつかう考え(減加法・減々法)で，ブロックや図，言葉などを用いて計算の仕方を表す。</p> <div style="border: 3px double black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>10のまとまり</p> </div>	<p>○ 問題の意味をとらえることができるように，分かっていることと尋ねられていることをおさえる。</p> <p>(技) 適切な立式をして，問題を解決することができる。</p> <p>(理) 11～18から1位数をひく繰り下がりのある減法計算は，被減数を10といくつに分けて考えればよいことを理解している。</p> <p>(発言・ノート)</p>
	1 第 12 時	<p>○ 挿し絵をもとに減法の問題作りをする。</p> <p>・自分が作った問題や友だちが作った問題について，ブロックや図，言葉などを用いて計算の仕方を表す。</p>	<p>○ 解決の手だてとなるように，「のこりは」「ちがいは」「どちらが」の言葉を示す。</p> <p>(考) 絵から減法の場面を見出したり，自分で場面を考えたりして，図や言葉で表現している。</p> <p>(発言・ノート)</p>
	1	評価	

6 本時指導者

7 本時の目標 (2 / 13)

- 繰り下がりのある減法計算において、被減数を「10 といくつ」に分けて、1 位数をひくことを考えることができる。(数学的な考え方)

8 評価基準

- A 基準：繰り下がりのある減法計算で、被減数を「10 といくつ」に分けて考え、操作や図を用いて順序よく説明することができる。
- B 基準：繰り下がりのある減法計算で、被減数を「10 といくつ」に分けて考え、ブロックや図で表すことができる。

9 本時の授業仮説

「12-7」の計算の仕方について、減加法と減々法の考えの交流を行えば、被減数を「10 といくつ」に分けて考えるよさに気付くであろう。

10 本時指導の考え方

本時では、減加法と減々法それぞれの考えが出やすいであろう「12-7」の問題を設定した。単元の前半に両方の考えを出させ、『10 のまとまり』をつかっているという共通点を認め合うことで、子どもたちは『10 のまとまり』を意識して本単元の学習を進めることができるのではないかと考えた。また、減加法と減々法の考えがあることをとらえさせておくことで、本単元を通して、減数と被減数の大きさに着目し、計算方法を選択しようとする子どもが育つのではないかと考えた。

そこで導入段階では、まず前に学習した「12-2」の問題を提示し、12を10と2に分けて、端数の2から2をひけば残りは10になり、簡単に計算できたことをふり返らせる。そして本時の問題より12-7を立式する。「今日も同じようにひかれる数を10のまとまりと2に分けてみよう。」「でも2から7はひけないな・・・」という課題意識をもたせる。そして、「今日の問題は10のまとまりをつかうとできそうだ。」という解決の見通しをもたせ、めあてをつくる。めあてづくりが困難な子どもには、教室の掲示物で、「ブロック」や「図」をつかって「10 といくつ」に分けて考えた学習を振り返らせたり、友だちの見通しを参考にさせたりする。

考えをつくる段階では、子どもが自分のめあてにそって自力解決をしていく。12を10と2に分けていない子どもには、ブロックの並べ方や図の描き方についてノートを見直すように促し、個別に支援を行う。また、早く解決できた子どもに対しては、図や言葉などでも考えを表すように促し、多様な方法で考えることができるようにする。

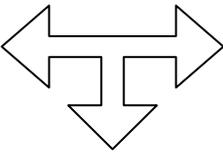
考えを交流する段階では、減加法で解決している子どもと減々法で解決している子どもを取り出し、ブロックや図、式を使って説明させる。7をどこからひいたらいいのかを問うことで、どちらの考えも『10 のまとまり』をつかって計算していることに気付かせ、まとめにつなげる。

よさを味わう段階では、「11-7」の適用問題をしたり本時学習をふり返ったりすることで、繰り下がりのあるひき算も被減数を「10 のまとまりといくつ」に分けて考えればよいことを実感させたい。

11 本時の展開 (2 / 13)

1 子どもが同じところと違うところを明らかにする。

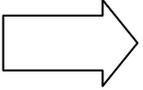
《既習の問題》
12-2



《本時の問題》
どんぐりが 12 こあります。7 こつか
いました。どんぐりはなんこのこって
いますか。

2 子どもがめあてをもつ。

《もとになる考え》
10 のまとまりをつかう。



《めあて》
12-7 のけいさんのしかたを、『10 のまと
まり』をつかってかんがえよう。

3 子どもが解決を試みる。

考え方 A
ブロック, 図
(減々法)

12 を 10 と 2 に分ける。
ばらの 2 から 2 をひく。10
のまとまりから 5 をひい
て 5 になる。
12-7=5 答え 5 こ

考え方 B
ブロック, 図
(減加法)

12 を 10 と 2 に分ける。
ばらの 2 から 7 はひけな
いから, 10 のまとまりか
ら 7 をひいて 3。3 と 2
で 5 になる。
12-7=5 答え 5 こ

考え方 C
式 (減加法)

12-7=5
10 2
10-7=3
3+2=5
答え 5 こ

4 互いの解決の共通点をみつけ, まとめる。

【ポイント】
10 のまとまりとばらに分け
て, ばらからひいて考えてい

【ポイント】
10 のまとまりとばらに分け
て, 10 のまとまりからひいて
考えている。

【ポイント】
12 を 10 と 2 に分けて, 10
からひいて考えている。

共通 どれも 10 のまとまりといくつに分けて考えている。

まとめ 12-7 は『10 のまとまり』をつかって, ばらからひく,

5 既習の問題と比較して, 確認する。(もとになる考えのよさを確認する。)

《既習の問題》
12-2 では, 12 を 10 のまとまりとば
らに分けて考えた。

適用問題
11-5

《本時》
12-7 でも, 12 を 10 のまとまりと
ばらに分けて考えた。

12 を 10 のまと
まりと 2 に分けて計
算するといいいね。



なるほど。2 から
7 はひけないか
ら, 10 のまと
まりからひくとい
いんだね。



ばらからひく,
10 のまとまりか
らひく考え方が
分かったね。

6 本時指導者

7 本時の目標 (3 / 13)

- 繰り下がりのある減法計算において、減数の大きさに着目しながら、『10 のまとまり』から先にひくこと(減加法)のよさに気付くことができる。(数学的な考え方)

8 評価基準

- A 基準：減数が 10 に近い場合の減法計算で、被減数を「10 といくつ」に分けて考え、操作や図を用いて順序よく説明することができる。
- B 基準：減数が 10 に近い場合の減法計算で、被減数を「10 といくつ」に分けて考え、ブロックや図で表すことができる。

9 本時の授業仮説

「 $12-9$ 」の計算の仕方について交流するとき、減加法と減々法を比較し、『10 のまとまり』や減数の大きさに着目させれば、『10 のまとまり』から先にひくという考え方(減加法)のよさに気付くであろう。

10 本時指導の考え方

前時までに、子どもたちは繰り下がりのある減法計算において、『10 のまとまり』に着目しながら、被減数 12 を 10 と 2 に分けて計算する仕方を学習してきている。

本時は、 $12-9$ の計算を、『10 のまとまり』に着目して考え、減加法のよさに気付かせる学習である。また、減加法、減々法両方の考え方があることをとらえている。

そこで導入段階では、まず前に学習した「 $12-7$ 」の問題を提示し、被減数を 10 のまとまりと端数に分けて、減加法、減々法の 2 つの方法で計算できたことをふり返らせる。さらに、前時の問題「 $12-7$ 」と本時の問題を比較させ、減数が大きくなっていることに目を向けさせる。そして、「今日も同じように、10 のまとまりといくつに分ければできそうだ」という解決の見通しをもたせ、めあてをつくる。めあてづくりが困難な子どもには、教室の掲示物や前時までのノートで、被減数を 10 のまとまりと端数に分けて考えたことをふり返らせる。

考えをつくる段階では、子どもが自分のめあてにそって自力解決をしていく。このとき、解決にとまどっている子どもには、どのように 9 をひけばよいか考えをもてるように、ブロックの 10 のまとまりとばらを指し示しながら考えさせる。また、早く解決できた子どもに対しては、図や言葉などでも考えを表すように促し、多様な方法で考えることができるようにする。

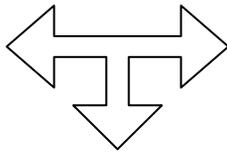
考えを交流する段階では、減加法をつかって解決している子ども、減々法をつかって解決している子どもの考えをもとに交流をする。『10 のまとまり』をつかって考えている部分を板書で位置付け、両方の考えに共通していることに気付かせる。さらに、それぞれの考えの根拠を問い、「10 のまとまりから一度に 9 をとることができる」という減加法のよさに目を向けさせたい。

よさを味わう段階では、「 $13-9$ 」の適用問題をしたり 本時学習をふり返ったりすることで、10 のまとまりから先にひくと簡単にできるよさを実感させたい。

11 本時の展開 (3 / 13)

1 子どもが同じところと違うところを明らかにする。

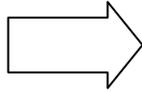
《既習の問題》
12-7



《本時の問題》
12-9

2 子どもがめあてをもつ。

《もとになる考え》
10のまとまりをつかう。



《めあて》
12-9のけいさんのしかたを、『10のまとまり』をつかってかんがえよう。

3 子どもが解決を試みる。

考え方A
ブロック, 図
(減々法)

12を10と2にわける。
ばらの2から2をひく。10のまとまりから7をひいて3になる。
 $12-9=3$

考え方B
ブロック, 図

12を10と2に分ける。
2から9はひけないから、10のまとまりから9をひいて1, 1と2をたして3になる。
 $12-9=3$

考え方C
式 (減加法)

$12-9=3$
10 2
 $10-9=1$
 $1+2=3$

4 互いの解決の共通点をみつけ、まとめる。

【ポイント】
10のまとまりとばらに分けて、ばらからひいて考えている。

【ポイント】
10のまとまりとばらに分けて、10のまとまりからひいて考えている。

【ポイント】
12を10と2に分けて、10からひいて考えている。

共通 どれも10のまとまりといくつに分けて考えている。

まとめ $12-9$ は『10のまとまり』をつかって、10のまとまりからひくとかんたんにできる。

5 既習の問題と比較して、確認する。(もとになる考えのよさを確認する。)

《既習の問題》
12-7では、10のまとまりとばらに分けて考えた。

適用問題
13-9

《本時》
12-9でも、10のまとまりとばらに分けて、10のまとまりから一度にひくとかんたんにできた。

12-9の計算は、10のまとまりをつかうと分かりやすかった



9をひくときには、10のまとまりから一度にひくとかんたんだね。



他のひき算も今日の考えを使って、やってみよう。

6 本時指導者

7 本時の目標 (6 / 13)

- 繰り下がりのある減法計算において、被減数を「10 といくつ」に分けて、減数の大きさに着目しながらばらから先にひく(減々法)ことよさに気付くことができる。
(数学的な考え方)

8 評価基準

- A 基準：減数と被減数の一の位の差が3以下のときの計算の仕方について、被減数を「10 といくつ」に分けて考え、操作や図を用いて順序よく説明することができる。
- B 基準：減数と被減数の一の位の差が3以下のときの計算の仕方について、被減数を「10 といくつ」に分けて考え、ブロックや図で表すことができる。

9 本時の授業仮説

「12-3」の計算の仕方について交流するとき、減加法と減々法を比較し『10 のまとまり』や減数の大きさに着目させれば、端数から先にひく考え方(減々法)のよさに気付くであろう。

10 本時指導の考え方

前時まで子どもたちは、繰り下がりのある減法計算において特に減数が5より大きいとき、減加法の考え方が簡単であることを学習してきた。また、ブロックや図を使って、減加法の計算の仕方を説明することを身に付けてきている。

本時は、減数と被減数の一の位の差が小さい「12-3」の計算の仕方を考える学習である。減加法と比較しながらブロックを使ったり図を用いたりして説明させることで、減数と被減数の一の位の差が小さいときには、端数から引く減々法のやり方でも簡単であることに気付かせたい。

そこで導入段階では、まず前に学習した「12-9」の問題を提示し、被減数を10のまとまりとばらに分けて、10のまとまりから先にひいて計算したことをふり返らせる。そして、本時の問題から「12-3」を立式し、「12-9」との違いについて話し合う時間をもつ。減数が小さいことに気付かせ、「3をどのようにひけば簡単かな。」を問うことで10のまとまりからひいたり端数からひいたり、自分なりの解決の見通しができるようにする。

考えをつくる段階では、『10のまとまり』をもとに着目して自力解決していく。このとき、解決にとまどっている子どもには、どこから3をひいたらよいかブロックを指し示しながら考えさせる。また、早く解決できた子どもに対しては、図や言葉などでも考えを表すように促し、多様な方法で考えることができるようにする。

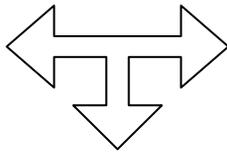
考えを交流する段階では、減加法で解決している子どもと減々法で解決している子どもを取り出し交流する。それぞれの共通点と順序性に着目させるために、『10のまとまり』をもとにして考えている部分を板書で位置付けていく。そして、減々法のよさに目を向けさせるために、減加法の考えと比べながら、「2ひいて1ひくほうが、ひく数が小さいからすぐにできる。」「10のまとまりから1しかひかなくていいからかんたん。」という根拠を引き出していきたい。

よさを味わう段階では、「11-3」の適用問題を減々法で解かせ、減数が被減数の一の位の数に近い場合に計算しやすいという、減々法のよさを実感させたい。

11 本時の展開 (6 / 13)

1 子どもが同じところと違うところを明らかにする。

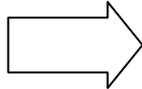
《既習の問題》
12-9



《本時の問題》
おかしが 12 こあります。3 こたべると、のこりはなんこですか。

2 子どもがめあてをもつ。

《もとになる考え》
10 のまとまりをつくる。



《めあて》
12-3 のけいさんのしかたを、『10 のまとまり』をつかってかんがえよう。

3 子どもが解決を試みる。

考え方 A
図、式
(減加法)

12-3=9

10 2

10-3=7

7+2=9 答え 9 こ

考え方 B
ブロック、図
(減々法)

12 を 10 と 2 に分ける。
はじめにばらの 2 から 2 をひく。つぎに 10 のまとまりから 1 をひいて 9 になる。
12-3=9 答え 9 こ

考え方 C
式 (減々法)

12-3=9

2 1

12-2=10

10-1=9

答え 9 こ

4 互いの解決の共通点をみつけ、まとめる。

【ポイント】
10 のまとまりとばらに分けて、
10 のまとまりからひいて考え

【ポイント】
10 のまとまりとばらに分けて、
ばらからひいて考えている。

【ポイント】
12 を 10 と 2 に分けて、2 から先にひいて考えている。

共通 どれも 10 のまとまりといくつに分けて考えている。

まとめ 12-3 は 10 のまとまりをつかって、ばらからひいてもかんたんにできる。

5 前学年・前単元と比較して、確認する。(もとになる考えのよさを確認する。)

《既習の問題》
12-9 では、10 のまとまりとばらに分けて考えた。

適用問題
11-3

《本時》
12-3 でも、10 のまとまりとばらに分けて、ばらからひいてもかんたんにできた。

今日の問題でも、10 のまとまりが使えたね。



12-3 の計算は、ばらからひいても、かんたんだね。



今日の考えを使って、もっとひき算の問題にチャレンジしてみたいな。